



Data

監督：ポール・シュレイダー
 原作：エドワード・バンカー『ドッグ・イート・ドッグ』ハヤカワ文庫NV 刊
 出演：ニコラス・ケイジ/ウィレム・デフォー/クリストファー・マシュー・クック/オマル・ドーシー/ポール・シュレイダー/ルイーザ・クラウゼ/メリッサ・ボロナ/レイ・ガイエゴス/チェルシー・メルトン

■■■ショートコメント■■■

◆クエンティン・タランティーノ監督が絶賛したという、エドワード・バンカーの同名のハードボイルド小説を原作とした本作は、いわゆるクライムサスペンス映画の典型。主人公は、刑務所仲間だったという①ニコラス・ケイジ扮するトロイ、②コカイン中毒で冒頭のシーンでは狂気そのものの姿を見せるマット・ドッグ（ウィレム・デフォー）、③取り立て屋を自称では利口にやっている巨漢ディーゼル（クリストファー・マシュー・クック）の3人だ。

所詮、刑務所で知り合っただけの3人の男たちがシャバに出てきてからどんな親友になれるのか自体が疑問だが、意外にもこの3人には『三国志』の「桃源の誓い」にみた、劉備玄德、関羽、張飛の3人のような絆の強さが・・・？

◆本作全編を貫くトロイの主張は「刑務所帰りは、いくら頑張っても無理」というもの。私の友人の1人である「お好み焼き千房」の創設者、中井政嗣氏は、いわゆるム所帰りの男を自社で雇って更生させることで有名になっている。それに照らせば、トロイの主張は必ずしも妥当しないのでは・・・？それはともかく、マッドやディーゼルより少し遅れて刑務所から出てきたトロイは、今日はマッドとディーゼルの接待を受けてご満悦だが、明日からの仕事は？その収入は？

3人のリーダー（マネージャー？）として仕事の世話をするのが知患者であるトロイの役割だが、とりあえずイカれた地元のギャングの首領（ドン）からある仕事の依頼を受けることに。それは、借金を返済しない男の赤ん坊を誘拐する仕事で、一見簡単そうに見えたが、報酬は75万ドルだから悪くない。その仕事の成功を祈って今日はとりあえず、酒、女、コカインに浸っていたが、最初からそんなにうまい話ってホントにあるの・・・？

◆本作を監督したのは、名作『タクシードライバー』（76年）の脚本を書いた鬼才ポール・シュレイダー。また、本作に主演したニコラス・ケイジはハリウッドのビッグネームの1

人だから、本作が2016年の第69回カンヌ国際映画祭「監督週間」部門でクロージング上映されたというもうなづける。

他方、原題がそのまま邦題とされている「ドッグ・イート・ドッグ」は、「食うか食われるか」という意味らしい。本作導入部で三人三様のキャラが紹介された後に展開していくストーリーはまさにそれ。そして、それは別の言い方をすれば、「一発勝負」「その場しのぎ」とも解釈することができる、綱渡りのなものだ。つまり、とりあえずの計画らしきものはあるが、およそはっきりした戦略戦術の下での計画遂行とはほど遠いものだ。したがって、彼らのやることは一度や二度は結果オーライを含めて成功しても、その次は・・・？

◆一世を風靡した鶴田浩二や高倉健主演のヤクザ映画では「男の美学」がカッコ良かったから、それは全共闘世代の「美学」と重なり合った。しかし、菅原文太や松方弘樹が主演した『仁義なき戦い』などヤクザの実録路線が花盛りになると、ヤクザのカッコ良さは鳴りを潜め、武闘性と権力闘争の凄まじさに焦点が移ってしまった。

しかして、本作にみる3人の主人公は日本のヤクザと同じようなアメリカのマフィアの構成員ではなく、単なるコカイン中毒のチンピラ中年オヤジにすぎない。したがって、いくらトロイがビジネスマン的な努力をして仕事を見つけようとしても、ろくな仕事があるはずはなく、リスク多くして実入りの少ない仕事ばかりだ。さらに当初は、劉備玄德、関羽、張飛という3人張りの「鉄の結束」を誇った3人の友情にも、いつしかほころびが……。本作後半からクライマックスにかけての三人三様の没落ぶりは、それぞれ覚悟の上だったとはいえ、男の哀愁とは程遠い、惨めなものに……。

2017（平成29）年7月14日記